

---

# 僕のバイトは探偵です。

山田詩織子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕のバイトは探偵です。

### 【Nコード】

N0822Z

### 【作者名】

山田詩織子

### 【あらすじ】

探偵のバイトをしている高校生、カルネ。  
彼は平凡でもなければ非凡でもない。

オッドアイの瞳をもつ小学生、シアン。  
彼女は傷を抱えながら強さを求める。

犬猫を探したり、  
落とし物を拾ったり、

周りに巻き込まれたり、  
事件に巻き込まれたり。

そんな話だ。

自ブログ、SSで連載していた小説に加筆、修正したものです。

## 幕開け

悪人になりきれない。

善人になりきれない。

死ねない。

生きられない。

そんな中途半端な僕に、アイツは言った。

『暇だし、世界を壊してみない？』

結局。

壊されたのは、僕だった。

糸を切られたあやつり人形は動かない。

それと同じように意図を切られた僕は動けない。

冷たいステージに横たわる僕の横で、いくつかの劇が行われた。

その内にいつのまにか、僕を中心に劇が始まった。

演じられるのは悲劇。

だけど、壊れた道化師は泣けなかった。

いや、泣けたとしても僕は泣いていたのだろうか？

それすら怪しい。

それから少し、時間が経って。

差しのべられた手は僕を立たせた。

そして、僕は一人で動けることを知った。

さあ、何を演じようか？

喜劇？

それとも悲劇？

全ては運命きま任せだ。

始まり始まり。

日曜の朝はいい天気だった。

雨戸を開け、4月の暖かい風を感じながら布団を干そうかと考える。

「たまには干すか」

せつかくの快晴なんだし。

ベランダなんて贅沢なものはないので、落下防止用の柵に布団を引っ掛ける。

ついでに空気の入れ換えもした。

毎日換気をしたほうがいらしいのだが、窓を開けっ放しにして学校には怖くて行けない。

いくら僕だってそこまで不用心じゃないのだ。

この部屋にわざわざ盗んでいくようなものはないんだけど。

「んっ」

軽く伸びをする。

いつもより遅く起きて体調も上々。朝飯も上手くできた。

それなりに気分がいい。

こんな日は家に閉じ籠っているより外で何かをしたほうがいい気がする。

だから、僕の姉さんが勤めている事務所に行こうと思いついた。

だからだと身支度をしていく。

寝癖と格闘している時、強めに玄関のドアが叩かれた。

「あなた！そこにいるのは分かっているのよ！」

なんか朝から昼ドラが始まっていた。

僕が一体何をしたというんだ。

どうでもいいけどドラマのドロドロ展開は苦手。

「あんちゃんよお金いい加減返してくれねーか？」

あ、ネタ変えてきた。

そろそろ反応してあげないとかわいそうなので、ドアを開ける。

「おはよう」

「おは…あいたっ！」

そこに立っていた少女がアパートのドアに額をぶつけた。

ドアも若干いやな軋みをあげる。

そこにいたらぶつかって分かっていなかったのだろうか、この子。

「それと浮気と借金とりごっこは止めようね」

「ご近所さんのいい噂になるから。」

「え、ドラマでよくやっているぞ？」

額を押さえながらきよとんとした顔をする。

昼ドラ見すぎだよ。教育に悪いよ。

「それよりどうしたの？君が僕のところにくるなんて珍しい」

シアンちゃんが僕を見上げ、その色違いの瞳が僕の姿を映した。



「大した理由はない。両親は仕事だし、兄と二人つきりは身の危険を感じてな。あと暇だから」

「マゼンタちゃんとアンジュちゃんはいないの？」

「マゼンタは旅行、アンジュはサッカーの練習試合だ」

納得した。

普段遊んでいる友達も用事でいない。

だが家にいれば兄と二人つきりになる。

だからここへ避難しに来たわけだ。

というか、高校生と二人つきりになるよりも嫌なことなんだな…。

彼女のお兄さんがとんでもないシスコン君なのだが、これについてはまたいつか。

正直なところ、彼は避けたいんだけどなあ…。変態だし。

「で、にく」

「ん？」

にくと呼ぶなにくと。

おおかた由来はカルネ「肉」にくって理由なんだろう。

「今日はどこか行く予定だったのか？」

「うん。事務所に」

「じゃあ私もついていく」

「いいけど、今日も多分暇だよ？」

「それでもいい」

シアンちゃんは仕事の邪魔をしたりしないので、事務所の人達に可愛がられている。

彼女も瞳の色のことで拒絶されないので気に入っているらしい。探偵事務所に入り浸る高校生と小学生ってどうなんだろう。コナン君はあれ住んでるし。

「ちょっと待ってて。荷物取ってくるから」  
「うん」

端から見たらなんて思われるんだろうな、なんて思いながら部屋の奥のバックを取りに行った。

## 黒猫 + 僕 + 探偵 II 事件 2

僕の住むアパートから三十分ほど歩くと古めのビルが見えてくる。その二階が探偵事務所だ。朝だというのに薄暗い階段を上がり、これまた古ぼけたドアを開けた。

「おはようございます」

「おはよう」

三人の視線が僕らに集まった。

「やあ、おはよう」

この四十代前半ぐらいの男性がこちらの所長。本当の名前は知らないので所長としか呼びようがない。

「わーいカルネ君だ！」

彼女はポワソン・ペンサーレ。

ブラコン気味の僕の姉。もちろん血は繋がっている。

「おはよう二人とも」

こちらが姉さんの同僚、ライスさん。

受付・カウンセリング担当のさばさばしたお姉さんだ。

あと一人は…出掛けているのか。

「お久しぶりシアンちゃん。ここに来るなんて珍しいわね」

姉さんが少しだけ不思議そうな顔をした。

シアンちゃんが最後にここに顔を出したのは一ヶ月ぐらい前だもんな。

「暇だったんでな」

「溜まり場かここは…」

ライスさんが小さくツツコミを入れた。

まあ、分からんでもない。

所長が側に置いてあったファイルから紙を引き出す。

「ちょうど良いところに来たね。仕事があるんだ」

「仕事…入ったんですか？」

「世界でもおわるんじゃないか…」

「それはひどくない!？」

所長がショックを受けていた。

だって、この事務所最高二週間も仕事入らなかったことあるし。

仕事に関して姉さん達より遥かに常識人のライスさんが頭を抱えていたのを覚えている。

姉さんは『なければいいじゃない』とか言っちゃう人だからな。さぞかしライスさんの頭痛はひどかったことだろう。

「猫探しをして貰いたいんだ」

「猫ですか」

「なるほど」

手渡された写真には赤い首輪をつけた黒猫が写っていた。

名前はヤマトか。猫は名前呼んでも来ないけど一応覚えておく。

見つかった時に連絡できるよう飼い主の電話番号を携帯に登録した。

「ポワソン君達はその後浮気調査が入っているからできないんだ」

「えっ、そんなに仕事入りましたか」

「そう。わたしもびっくりした」

「ライス君まで何を言っているんだい!？」

明日は槍が降るかもしれない。

### 黒猫 + 僕 + 探偵 II 事件 3

猫探しについては詳しくは省こう。

猫がいきなりスポットを順番に見回って、見つけて、追いかけた。そして捕まえて引っ搔かれた。

シャーと全身全霊を持って嫌がられてしまった。地味にへこんだ。

今はシアンちゃんの腕の中で大人しく抱かれている。

僕が抱っこしようとする、ヤマトはやはり嫌がって暴れるのでシアンちゃんに彼（ヤマトは男の子）の世話を頼んだ。

…なんなんだろう。そんなに僕がいやなのか。

それともいつかヤマトがデレてくれるとか、そういうの期待しているのかな。

いや、それはないな。

猫のツンデレってなんだよ。どんな電波受信したんだよ僕。

「私も猫飼いたかったな」

「コシコシとヤマトの喉を撫でながらシアンちゃんが呟いた。

「飼えないの？」

「お母さんが毛のアレルギー持ちだからな」

「ああ…じゃあ動物全般は無理なんだ」

「でもその他は良いって言われた」

「例えば？」

「コブラ」

「まさかの毒蛇!？」

ともあれヤマトを無事発見確保したので、依頼主に電話をかける。  
ぶるる、と機械音を聞きながら待つ。

セブンコールで切られた。

ガチャンって。…ん、ガチャン？

「…あれ？」

意図的に切られた、みたいだな。

もう一度掛け直して見ると、今度は留守番電話に繋がった。

おかしい。

「どうした？」

「なんというか…当たって欲しくない予感がビンビンと」

シアンちゃんと目があう。

僕は肩を一度竦めて見せた。

「事件発生かも」

「どうするんだ、にく。一度事務所に戻るのか」

「いいや 現在進行形で巻き込まれているかもしれない。だったら早く助けにいかなくちゃ」

「分かった。場所は？」

「近い。走れば五分ぐらい」

今いる地区と、依頼人のマンションの最短ルートを考える。

下手に近道はしないほうがいいか。急がば回れって言うしな。

シアンちゃんに付いてくるように言って走り出す。

「あ、ヤマト」

シアンちゃんの腕からすり抜けてヤマトが僕らの先頭を走り出す。

まるで飼い主の危機を察して、僕たちを急き立てるみたいに。

- - -

高級マンションの四階。

依頼人は女性。

だからなのか、警備がそれなりに頑丈そうだ。

エレベーターを使い、再びヤマトを抱っこしたシアンちゃんと共に  
目的の部屋に行く。

名前は…よし、合ってるな。

深呼吸してチャイムを押す。

中から見ているという合図のランプがついたのでインターホンに向



かって喋る。

「えっと、こんにちは」

顔の見えない相手に話すのは苦手だ。

「電話したのですが、留守番電話だったので直接来てしまいました」  
違和感。

「…依頼されたヤマトくんを見つけたので、……」

言葉を止めた。

だって変じゃないか。

ここまで相手は一言も発していない。

普通、何か言うはずだろう？

どれだけ非常識な人でも、「あーはいはい」ぐらいは言いそうなものなのに。

喋れないとかは聞いていない。

いや、所長によれば明るい女性だと聞いたのだが。

その『明るい女性』がいつまでも『黙りこくる』ものなのか？

先ほどの電話の事もあって警戒が高まる。

「あの、あなた……何をしているんですか？」

『……………』

ザアアとノイズのみがインターホンから聞こえるだけ。

「……………」

「……………」

ニヤア、と焦れるようにヤマトが鳴いた。

瞬間、インターホンの向こう側が騒がしくなり、玄関へ全力で走ってくるような物音がした。

本能がこれはヤバイと警告した。

「行くよ！」

「お、おう！？」

エレベーターなんて悠長に使ってられない。

非常階段を使いシアンちゃんを先に行かせて掛け降りた。

上から見ている可能性もあるのでしばらく隠れた後に、僕たちはマンションの敷地から抜け出した。

「何がなんだか……。にく、どうしたんだ？」

近くの公園のベンチ。

息を整えながらシアンちゃんが聞いてくる。

「依頼人じゃない誰かが、いたっぽいんだ」

確証はない。

確定できない。

もしかしたら依頼人さんがあんな人なのかもしれないとか、色々あるけど。

だけど、直感的に思ったのだ。

違う。なにか、違う。

「ヤマトの声聴いたとたんに反応したのも気にかかるけどね……」

あれはただ単に条件反射とか、きっかけとか、そんなものかも。

まさか誰かさんがヤマトを狙っているとか、そんな展開ないだろう。

しかし、顔をばっちり見られたわけだから下手に動かないほうがいいかもな。

どうして僕ばかりハンデが溜まっていくのか。

「……む」

「シアンちゃん？」

唸るように声を洩らし、公園の出入口を見るシアンちゃん。  
つられて見ると、

「……………わお」

どう見てもガラの悪いお兄さん達がこっちに向かって来ていた。

…もうちよい、遠くまでいくべきだったな。

僕たちから二メートルほどの距離を置いてお兄さん達は止まった。

「…ベンチに座りたいんですか？ならどうぞ」

「ベンチになんか用はない。その猫を寄越せ」

まさかのヤマト狙いかよ。

「依頼人以外には渡せない決まりになっていまして。すみません」

真っ赤な嘘だ。真っ赤な誓いではない。嘘。  
決まりとかさっぱり知らないし、分からない。

せいぜい他人の敷地に入らないとかそういうのぐらいだ。

「んだよガキの癖に偉ぶって。何様のつもりだ？あ？」

「どうやら痛い思いしないと分からないみたいだな？」

あれれーなんか選択肢ミスったよー。

しょうがない、シアンちゃんとヤマトだけでも逃がすか。

「にく、ヤマトを」

「え？」

ぽんつとヤマトを渡された。

ちよっと引っ搔かれた。どこまで僕が嫌いなんだよお前。

シアンちゃんはショルダーバッグから鞘付きのフルーツナイフを取り出す。

そして、鞘をはらって抜き身の刃が現れる。

そのままびたりとお兄さん達にナイフを向けた。

「な……」

お兄さん達がどよめく。

当たり前だ、銃刀法違反してるんだから。じゃなくて。

「そっちが暴力で来るなら、私も武力で行く」

「シアンちゃん………」

彼女は　いつもこうなのだ。  
逃げない。  
退かない。  
強くあり続けようとする。

「シアンちゃん、危ない。逃げよう」  
「追ってくるぞ」  
「追うなら逃げ続けよう」  
「……ヘタレ」

うっ。  
まあそうなんだけどさ。

お兄さん達が、ようやく小学生にナイフを向けられたショックから立ち直ってしまったらしい。  
こちらがわに凶器があるので下手に行動できないみたいだ。

「……けっ」

お兄さん達のリーダーっぽい人が唾をはいた。汚ない。

「猫を寄越せばそれでいいんだよ、グダグダ言いやがって」  
「何故、猫を狙うんですか。関係ありませんよね、あなた達に」  
「頼まれてんだよ。無駄話はいい、怪我なんかしたくないならさっさとしろ」

「嫌です。なら、その人が来ればいいじゃないですか」  
「はあ？ふざけんじゃねーぞ、そっちに刃物があるからって調子の人な」

調子のねません。  
ヤマトの爪が地味に痛い。

「ったく、なんたためーは。気持ち悪い」

リーダーさんはシアンちゃんを見ながら、吐き捨てた。  
彼女は動揺したように切っ先を震わす。

「なんだよその目、色違いで。呪われてんのか？」

余裕が出てきたのか、後ろのお兄さん達もせせら笑う。

「親も大変だなあ、こんな変な子供生んで。ははっ、よく生きていこうと思え」

「謝れよ」

僕にしては、ずいぶんと低い声だ。

「謝れ。訂正しろ。彼女は気持ち悪くない」

「……は？ふざけてんのか？」

「１ミクロンもふざけていない。いいから謝れよ」

「こく…」

お兄さん達は顔を真っ赤に指をならした。

ああ、マズイかな。

反省も後悔はしていない。

シアンちゃんをなんとか逃せればいいや。自分のことなんてどうでもいい。

「謝るのはそっちだろ？散々コケにしゃがっ…へぶっ」

突然リーダーさんが前のめりに倒れ込んだ。  
ざわ…ざわ…とお兄さん達が驚く。

「そんな年になってまだ女の子いじめか 将来が不安だ」  
「てめっ、よくも！」

リーダーさんを後ろから蹴り倒した男にお兄さんの一人が掴みかかる。

綺麗な一本背負いで放り投げた。

「きりもみ回転式土下座ぐらいはしてもらわないとな」

相変わらずのだるそうな顔。

お兄さん達の攻撃を避け、蹴りを叩き込みながら僕らの前に来る。  
彼の後ろは死屍累々。

「……なんでここにいるんだよ」  
「たまたまだ」

探偵事務所の一員。

僕のちよつと苦手な奴。

シュヴァインだった。

「で、なんだ？なにが起こった？」

シュヴァインは振り向いて倒れ伏しているお兄さん達を眺める。

十人ほど相手にしておきながら息は全く切れていない。

体育の持久走で死にかけられる僕よりはるかに体力があるんだろうな。

「えつとね」

簡単に説明する。

ふんふんと納得したようにシュヴァインは頷いた。

「なるほど、つまりお前はロリコンなんだな」

「…何を聞いてたんだよお前！」

そんなこと一言たりとも言っていない。

シアンちゃんが呆れたようにため息をついた。

彼女はシュヴァインと初対面の時、さんざんこいつのペースに振り回されていたようだ。

ようだ、というのは僕はその時気絶していたから。死にかけていたともいう。

「しかし……その猫が狙われてるのか」

「うん、このヤマトがね」

「どうすればいいんだ？」

シアンちゃんが困ったように首を傾げる。

つられてツイントールが小さく揺れた。

女の子らしい仕草で可愛い。

「まずそのナイフをしまえ」

「あ、忘れてた」

「…忘れるものなの？」

それは怖いな。



「埒があかねーし、ちょっと詳しく聞くか」

「え？」

スタスタとお兄さん達の所に歩いていくシュヴァイン。僕、シアンちゃん、ヤマトでなんだなんだと見守る。

彼は屈んで、丁度顔を上げかけたリーダーさんの顔を掴みもう一度地面とごっつんこさせた。

痛そう。

「……………」そのまま無言で腰に手をやり、すらりと細身のナイフを取り出した。

そう、こいつもナイフをもっているのだ。

一本のみのシアンちゃんと違い、おそらくは何十本も。

シアンちゃんとシュヴァインで銃刀法違反コンビと名付けてもいい気がする。

しかし半年前、その違反コンビに助けられたのだから強くは言えない。

「で、だ。お嬢ちゃんへの悪口をまず謝ろっか」

「な…なんでそんなこと」

ナイフが閃いて、リーダーさんの顔のすぐ横に突き刺さった。いっさいがっさい容赦ない。

「ま、私情なんだけどな。俺は人を見た目で判断する奴が嫌いなんだ」

「……………」そうなのか？」

「……………」そうでもないよ」

「そこ黙ってる」

聞こえてたか。

「人の外見に触れるのはあまりよろしくないんだが、知らないか？」

「知らないし興味も」

「

「そうか、残念だ」

シユヴァインは地面に突き刺さったナイフを抜いた。

「お嬢ちゃんがいるから過激なことはできないが……ちょっと、外見変えてみるか？」

恐ろしい悪魔の言葉だった。

「皮膚を少しずつ剥ぐとか、鼻とか耳削ぐとか。安心しろよ、死にはしない」

その間僕はシアンちゃんの耳をすっかりガードしていた。

教育に悪いだろうが馬鹿。

昼からこんなことするような非常識なやつじゃないからただの脅しだろう。

なんかシアンちゃんが照れていた。

「嘘だろオイ……そんなことしたことあんのかよ」

「本当だ。あと悪いが、今あげたこと」

シユヴァインはふと表情に陰りをみせた。

「何度か経験、あるからな」

どちらなのは、知らない。

それは詮索しないほうがいいのだろう。

「やられたくないならお嬢ちゃんに今すぐ謝って、あと誰に頼まれたのか言え」

「ひいっ……す、すみませんでしたー！」

土下座のような形で叫んだ。

一時的にシアンちゃんの耳を解放する。

「あ、ああ……」

ものすごくドン引きしていた。無理もない。

「次のステージに移ろうか。指図したのは誰だ？」

「しらねえー！」



なんでだ。

「俺は先輩と仕事いかなくちやいけないから離脱だ」

「あ、うん」

「いいか、危険な目にあつたらさっさと逃げるよ」  
釘を刺された。

シユヴァインを見送って、無謀にもまたマンションに行こうとなる。  
また刺客を送ってくるのだろうか。そしたら…もう事務所に帰ろう。  
僕はともかく、シアンちゃんが危ない。

パトカーとすれ違った。

パトカーとすれ違った。

パトカーとすれ違った。

「…………あれ？」

一度にずいぶんパトカー走るな。

「にく、あのパトカー…」

ナーと同意するようにヤマトが鳴いた。

パトカーの向かう先にはさっきのマンション。

嫌な予感しかしなかった。

嫌な予感ほどあたるものだ、とは誰が言ったのか。確かにそうだと思う。

二年前、家にさしかかる道を歩いたとき。

三年前、部室を開けようとしたとき。

酷く嫌な予感がして 当たった。当たってしまった。

忍び込むようにして入ったマンションの、四階。

「……………」

「……………」

シアンちゃんと僕は声が出なかった。

担架に乗せられ運ばれた誰か（・・・）がエレベーターに吸い込まれていくのを見送った。

「……もしかして、さっき来た時点で遅かったのかな」

「……………」

依頼人さんじゃないといいんだけど、と思ったけどすっかりと彼女の、さつきインターホンを押したばかりの部屋が開いていて。

しかも検察官とか警察が出入りしている。

これでもかとはかりに現実を見せつけてくれたもんだから、微かな希望は露と消えた。

「……………」

気づくとシアンちゃんが僕の服を掴んでいた。

ヤマトは空気を読んで酷く大人しい。

声をかけるべきか迷った。

「なにしてんだ、お前ら」

僕らのほうへ刑事の一人が寄ってくる。

泣く子も黙る鋭利な表情。

海賊みたいな眼帯。

「…アスマルトさん」

半年前に色々とお世話になった人だった。そしてお説教を一時間もしてくれた若干迷惑な人。

シアンちゃんの友達、マゼンタちゃんのお兄さんだ。

年は離れているけど血はちゃんと繋がっているとかなんとか。

「シアンも。ここは遊び場じゃないんだからな」

遊び場にもしたくねーよ、こんな高級マンション。

「そのこの部屋の人に用がありました」

「……何のだ？」

「猫を見つけたので、送り返しにきたんですが…今大丈夫ですか？  
我ながら白々しい質問だと思う。

答えなんか分かっている。

「…それはどうしても、か？」

「頼まれている以上はどうしても。一分でもいいので」

アスマルトさんは僕の耳元で囁く。

それがシアンちゃんに直接聞かせたくないからだということには後で気付いた。

「彼女は 死んだ」

死んだ。

そうか、死んでしまったのか。

やっぱり、僕のことながら予想していた通りにあっさりとした感想だった。

「そうでしたか」

「もうちょっとその猫を預かってくれないか？こちらもバタバタしてて手が回らない」

「でも」

シアンちゃんがアスマルトさんを見上げて声をあげた。

「さっき、ヤマトを狙って変な奴等に絡まれたんだ」

「ヤマト？」

「その猫の名前です。すつじく凶暴です」  
「ハーツと唸られた。ほら凶暴。」

「マジか」

アスマルトさんが無謀にもヤマトに手を伸ばす。  
引っ掻かれるかと思っただが素直に撫でさせた。  
あれれ。

試しに僕が手を伸ばすと引っ掻かれた。  
あれれ。

なんだこの不平等な扱いは。

「猫が狙われている…ということとは？」

「私たちにも分からない。ヤマトの脳内になにかインプットされて  
いるとか」

「だったらあんなゴロツキ使わないでしょ」

「怪我とかはしなかったのか、お前ら」

「大丈夫だ」

「通りすがりの月光仮面が助けてくれたんですよ」

流石に知り合いがその人たちをボコボコにしましたなんて言えな  
い。

下手したらシュヴァインが捕まりそうだ。

「そうか。悪いな…何かしら危害を与えられないところちも動けな  
いんだよ」

「へえ」

まあそうだろう。

いちいちそんなので動いていたら警察がいくつあっても足りない。

「いいか、何かあつたらすぐ言え。あと事が収まるまで無茶はすん  
な。半年前みたいに」

「…は、ははは」

まだ根に持たれてたのかな、困った困った。

「なあ、アスマルト」

「なんだ」シアンちゃんが今さらりと呼び捨てにしたが気にしていない。

長い付き合いだからなのか…っーか大胆すぎるだろ、年上を呼び捨てって。

「その人は自殺か？他殺か？」

辺りが静まり返った気がした。

アスマルトさんのシアンちゃんに対する配慮は意味がなかったと言  
うことか。

「一度でも狙われていたなら言う必要はあるな」

周りを注意ぶかく見回す。

咎められたら面倒なのだろう。

小さく単語を吐き出した。

「他殺、だ」



「他殺だ」

予想はしていた。

他殺だと、誰かに殺されたと。

「そうなんですか」

僕は僕で簡素で驚きもなくストンと事実を受け止めた。

死んだ人に同情するとか嘆くとか、僕はそんなことを出来ない。

いつそ彼女に代わり僕が死ねば良かったのに。

こんな、人の死にこれっぽっちも感情を動かせない奴なんか世の中に必要だろう。

だったら猫を心配して依頼したあの人のほうがまだ人間味があったはずだ。

「カルネ」

アスマルトさんがいささか厳しい目をしていて。

「大丈夫か？」

「え？僕は全然オツケーですよ」

「……まあ、ならいいが。あと全然の使い方違う」

おや。全然の使用を間違えたか。

「とりあえず、ここから帰れ。安全なところに」

「うん」

「はい、分かりました」

「カルネ、お前一人じゃないんだからな。危険なこととはとにかく避ける」

「……はい」

信用ないなあ、もう。

「　　にく」

事務所へ向かう途中。

沈黙を破るようにシアンちゃんが切り出す。

「人って、あっけなく死んじゃうもんなのか？」

「ん…まあね」

相手は小学生。

まだ道徳とかで死について話をされているのかは分からないけど、ここはマイルドに言葉選びをしなければ。

案外あっさり、人間は、生物は死ぬ。

例えば、首を絞められれば死ぬ。

例えば、高いところから落ちれば死ぬ。

例えば、刺さりどころが悪ければ死ぬ。

例えば、頭を撃たれば死ぬ。

例えば、毒を飲めば死ぬ。

「生き物はみんな脆いよ。脆くて、弱い。だからあっけなく死ぬ」

手持ちぶさたでなんとなくシアンちゃんの頭を撫でる。

ふわふわでつるつる。ほっそい髪の毛だな。

「そういうもんか」

「そういうもんだよ」

うーん、なんて言えばいいんだろうな、こついうとき。

気の効いた言葉はどれだけ探しても見つからない。語句の少なさに愕然とした。

これからはちゃんと国語の授業受けよう。今は古文だけど。

「そうか」

「うん、多分」

ナアーとヤマトが相づちを打つように鳴いた。

無言のままテクテクと歩く。歩く。歩く。

気まずいな。「にくは、さ」

「うん？」

「今まで何人、身近な人が亡くなった？」  
ふと食パンが浮かんだ。

「……………なんで、そんなことを」  
「慣れていたから？」

シアンちゃん自身もよく分からないというように疑問符をつけた。  
慣れて…ああ、さっきアスマルトさんから他殺だ言われたときのこ  
とを言っているのだろうか。

「そりゃ、ねえ。僕は君より長く生きているから」  
「違うんだ。こう、病死とかじゃなくて……………」

言おうか言つまいか渋っている。  
怒らないから先を言っつと促すと、シアンちゃんは恐る恐る口を開  
いた。

「にくの身近な人が、殺されたとか」

どくんと心臓がはね上がった。

…侮れないな、小学生の洞察力。  
いやでも他殺言われて驚かないからそう思われても仕方ないか。  
半年前から思っていたけど、妙に賢くて鋭いな、この子。  
理性が年齢と比例していないというのか。

「……………あることは、あるよ」  
「どうしよ。話すか話さないか。」

でも半年も僕といてくれるんだから、言うべきか。

「あんまり人には話さないで欲しいんだけど」

「約束する」

「二ヤア。」

「今までに三人、身近な人が死んだ」

「……………」

「そのうち一人は…追い詰められて自殺だけど、殺されたようなも

のだし」

身近な人じゃないならもう一人いるけど、それはいいか。あと殺されたじゃなくて殺したようなもの、だしな。

「…にもなかなか難儀な人生送ってたんだな」

「難儀って」

シアンちゃん本当に小学生か？難しい言葉使いすぎだろ。

「じゃあ私もちよつとしたヒストリーを話そう」

ヒストリーで。

表情から見るに明るいヒストリーじゃなさそう。

「…！」

「！」

シャー。

反応それぞれに危機を感じる。

反射的に後ろを振り向く。

バイクに乗ったフルフェイスヘルメットの人間がいた。

「にく、あいつ怪しい」

「ダメだよ、見た目で判断しちゃシュヴァインに刺されるよ」

ああいうのが意外と善人で親切な人が多い

「猫をよこせ」

わけねーよな。

人は見た目が九割。

「…またそういう展開ですか」

「嫌だと言ったら？私たちを轢くのか？」

「そしたらこのヤマト君は無事じゃないですね」

THE・人質ならぬ猫質。

「猫本体は必要ではない」

「え……？」

それはどういう意味だ？  
まさか首輪に何かあるとか。

「渡さないなら殺してでも奪い取るまでだ！」

うわっ考えてる暇じゃなかった！

ヤバイ！ヤバイヤバイヤバイ！

何がヤバイってヤバイからヤバイ！

「きゃあっ！？」

「行くよ！」

エンジンがかかりきる前にシアンちゃんWithヤマトをお姫様だ  
っこして、逃げ出した。

全く洒落にならないリアル鬼ごっこ開幕。

## 黒猫 + 探偵 + 僕 II 事件 8

前回までのあらすじ。

猫探しからの殺人事件発生、そして今現在デスレース中。

どうしてこうなった。

そりゃあもう僕は平凡な高校生とは言えないけどさ、だからといって非凡な事態に遭遇して良いわけでもないんだぜ。

適当に細い道を曲がったりしてなんとか相手の追跡から逃れようとする。

だけど悲しいかな、ここらは暮盤の目のように家が規則正しく建っている。

よって、見失ったとしてもちよつとろつければたちまち僕たちの事を見つけてしまうのだ。

スーパーで一緒に来た人がいなくなって、棚の間を探すような感じ。しかもバイクというオマケ付き。どうあがいても勝てそうな気がしない。誰かに助けを求めればいいのだけれど、説明している間に轢かれそうだ。

体力も、今は必死だからなんとも思わないけどいつかは限界が来る。どうする。

一体僕はどうすればいいんだよ…。

猫渡せばいいじゃん

頭の中でそんな意見が出た。

くそ、悪魔の囁きか。天使の反論力モン。

ちよつと天使…それじゃ今までのことが水の泡だよ？

うつさいなあ悪魔は。たまには妥協をしろよ

天使かよ！天使がそんな悪魔の囁きしていたのかよ！

なにしてんだよ天からの使者！悪魔がまともすぎてギャップで頭がクラクラするよ！

「にくく？」シアンちゃんの声で意識が戻る。

今はそんな妄想（現実逃避ともいう）してる場合じゃなかった。

「何、かな、シアン、ちゃん」

今の僕はかなり息が切れている。

公園とかにこのまま行ったら危ない人かもしれない。お巡りさんごちです。

「あの、わ、私、一人でも走れるし……」

ぼそぼそと照れるように提案してきた。

そうか、彼女運動系の子だからな。抱えられるより自分の足で走った方が早いのかも。

隙を見計らってシアンちゃんを降ろす。うわあい腕がプルプルしている。

「事務所は遠いのか？」

「うん。なんとか、行こう、と、してるん、だけど、なかなか、うまく、いなくて」

肺が重労働に悲鳴をあげている。

「……にくくてアクション系苦手そうだな……」

そんなこと言いながら走るシアンちゃんはすごく速い。

もうありありと僕に合わせている様分かる。小学生にペース合わせてもらおう高校生ってなんだよ。

「っ！」

振り向かなくても分かる。バイクがすぐそこまで来ていた。

「ごめんシアンちゃん！」

「っおお！？」

隣にいるシアンちゃんを押し、僕も逆方向に跳ぶ。そしてコケた。かっこつかない。

先ほどまで僕たちが並んでいたところをバイクが走り抜けていった。

「し、シアンちゃん大丈夫……?」

「どちらかというところを聞くのは私だ」

しっかり立っていた。バランスをとってギリギリ持ちこたえたのか。ただ、無意識に腕を緩めてしまったのかヤマトは彼女の足元にいた。こいつは猫だしな。気にすることもあるまい。

辺りを見回すと団地の近くにある工事用の機械が置いてあるところだった。

ちよつと遠くに来てしまったようだ。…あと、人通りが少ないんだっけか、ここ。

数メートル先に行ったところでバイクは止まった。と思うとUターン。

そのまま、リベンジのようにシアンちゃんとヤマトへと突っ込んでいった。

「え?」

彼女は理解できていないようにぼかんと惚けた顔でバイクを見る。

「後ろに下がれ!」

声を張り上げてそばに何かないか探る。あつた。鉄パイプ。

僕の大声に気づいて慌ててシアンちゃんが後ろに下がったのと同時に真っ直ぐ鉄パイプを投げた。

すぐに固い音を立ててパイプはアスファルトに転がる。

別にバイクにぶつけようとしたわけじゃない。

転ばせるために投げただけだ。

「うお!?!」

猛スピードで走ってきたために鉄パイプで滑り、バランスを崩す。そしてそのまま横転した。



「ざまあ」

小さく呟く。

「にく……?」

「ん?」

「あ、いや」

勢いで尻餅をついたシアンちゃんに手を貸した。

フルフェイスヘルメットの人は残念ながら無事だったようだ。

長袖長ズボン、あとは受け身をとったようだから。

「ちくしよ…訴えんぞガキ共が」

「むしろこっちが訴えたいですよ」

どうして殺されかけてたのに金払わないといけないんだ。

「それで、どこから僕らをつけていたんですか?」

「あ?あの妹のマンションからだ。つたく、予定じゃまだ警察は来ないはずだったのに」

ぶつぶつ言ってるけど気にしない。

アスマルトさんと会って、マンションを出たあとからずっと…か。

気づかなかった。なんか嫌な雰囲気ではあったけど、大して気にしなかったし。

それで、人のいないところでお披露目したわけだな。

「妹ってことは身内ですか、彼女」

「そーだよ。それは身内の猫だ、さつさと渡せ」

「ついさつきまで轢こうとしていた奴に渡せるか」

ヤマトもシアンちゃんから離れずにヘルメット男を睨んでいる。

ヤマトは男にあんまり会ったことないのか、初めての対面なのか。

飼い主の兄よりシアンちゃんへの信頼が高いんだな。出会ったばかりなのに。

3対1。

すっと無言で男は立ち上がった。

「うつせーよガキが。俺に口出ししてんじゃねえよ…！」  
転がっていた鉄パイプを手に取る。  
やばい、あれ回収しとくんだった。

「誰も彼も妹妹だ！もう少しでうまくいくところだったのに、お前らのせいであつ！」

「……………」  
男とシアンちゃんの視線があつた。

「クソが、なんだよその目の色は！邪魔すんな、死ねよ！死んじまえ！…！」

「な……………」微かに聞こえた彼女のうめき声。

叫んだ後に鉄パイプを振りかぶり真つ直ぐと僕らを襲いかりにきた。

パイプが一直線に降られる。

咄嗟に左腕を出して、右手でシアンちゃんの目を覆った。

後ろから抱きついてる感じだけど仕方ない。お巡りさんこないで。左腕に鈍い衝撃。ひびぐらいは入ったか。

「……………は？」

「何か？頭がち割れるとか幻想見てましたか？」

「な、なんでそんな平然としてるんだよ…普通泣きわめくとかかなんとか」

「泣きわめくとかですか」

左側にぐいと力を入れると鉄パイプが男の手から溢れ落ちた。握る力を無くしてたのかな。

シアンちゃんを解放して後ろにいかせる。ヤマトも付いていく。

「むしろ、泣かせてくれ。大切な人を亡くした時に、泣けるようにしてくれよ」

右手で拳を作り、ヘルメットを殴った。

力ないパンチだったけれど後ろへとバランスを崩して転ばせるには十分だった。

馬乗りになって見下ろす。

ヘルメット、外すべきかな。

「なんとなくあなたが犯人な気がするんですが、理由あげていいですか？」

さつき自白っぽいこと言ってたしな。

「まずマンション。あれってセキュリティがありますからまず見知らぬ誰かがいきなり侵入なんてできません。

「それに四階ですからね。泥棒するとしたら、僕なら一階に忍び込みますよ。

「しかし、彼女は ヤマトの飼い主さんは殺された。どうやら一人暮らしだったようです。「セキュリティマンションに住んでいるということはある程度の警戒があるはず。ましてや一人暮らしですから。」

「なら警戒心のない人の犯行ではないだろうか？そこで身内ですよ。

「…まあ、こうなるまで兄弟がいるとは考えられませんでしたけど。

「現実はいまよくないですね。刑事さんはすごいと感心しますよ。

「話が脱線しましたね だから、身内を名乗り僕たちからヤマトを取り上げようとした。

「僕の顔、インターホンで見たんでしょう？だから容易に追いかけられた。」

「あの後に殺人事件が露呈しましたからね。 ヤマト奪回もそうです。」

が口封じのつもりもあるんでしょ？

「とういか、今この状況、僕たちを逃したらどうなるか分かったもんじゃないですね。」

「と、ここまでが僕の考え……妄想ですかね。どうなんですか？ 実際のところ。」

「あなたは犯人なんですか？」

矢継ぎ早に推理してみた。

本当は事件が起こった時に犯人候補を集めて行ったほうが探偵らしくていいんだけど、バイトですし。

「犯人だったところでどうする？」

「さあ。あなたから逃げましょうか」

バイクも壊れてるしさつきよりかは楽勝だろう。

「そうかよ！ こっちはバレされたら困るんだよ！」

「かはっ」

「にく！」

脇腹に拳を突っ込まれた。

あ、これ犯人確定か？

「ガキ二人の処分ぐらいどうってことねえよ……ペラペラペラペラ話しやがっ、ぐっ！」負けじと気管を親指で圧す。

左腕が熱を帯びてきたのであまり酷使はしたくない。

「な`に`を……！」

「殺されかけた分、お返しをしなくてはと思いましたが」

指を埋めていく。相手の心拍数が伝わるほどになってきた。

払い除けようとしてきたので膝と地面の間に両手のひらを固定した。少しずつ少しずつ体重をかけていく。

ヘルメットの下の表情は多分見ても気分の良いものではないだろうからやつぱり外さないままにする。

だいぶいったかな、という時にシアンちゃんが横から抱きついてき

た。

親指が気管から離れる。

「何をやってているんだにく！そいつを殺す気なのか！？」シアンちゃんがか叫んだ。

彼女の青い瞳はこの上なく冷たく、赤い瞳は燃え盛るように光っていた。

気まずくて目をそらす。

なんだかな。なんだか僕の醜いところを見透かされているようだ。

「お前は今、何をしようとしていたんだ！」

「……絞めようと、してた」

「なんで！」

「だって……」

だって。

「この人、僕たちを殺そうとしたから……」

言って後悔した。

まるで彼女もこんな事態を起こしたと言わんばかりじゃないか。

むしろ僕が巻き込んだほうだろ。責任転嫁も甚だしい。

「ダメだよ。それだけの理由で、人を殺しちゃダメだ」

優しく抱き締めてきた。

抱き締めてくる前、シアンちゃんはとても泣きそうな顔をしていた。

初めてみるかもしれない表情。

「にく、私は、大丈夫だから」

「……そっか」

シアンちゃんが無事なら。

もう僕はいいつにかまう道理なんてない。

さっき彼女のことを散々言いまくっていたけどもういいや。疲れた。

彼女が気に病んでたらもうちょいするつもりだったんだけど、そうでもないし。

咳き込む男から立ち上がり、右手で携帯を取り出す。

「アスマルトさんの携帯番号分かる？」

「うん」

聞いてなんだけどどうして知っているんだ。

友人の兄というカテゴリーでも普通知らない人のほうが多くないか。

「教えてくれないかな。…ここから先は警察に丸投げするから」

あと病院行かないと。

それから。  
ひびの入っていた左腕にギプスを巻かれ、それから事情聴取を受けた。

何がどうしてどうなったのかすべて覚えていた範囲で話す。

僕がしたことは、正当防衛ということで片付けられた。

そりゃそうか。こっちは怪我してるし。

過剰な正当防衛をしていたら逮捕されていいに違いない。本当に彼女には感謝だ。

そして今は、通路に置かれたベンチでシアンちゃんを待っている。  
窓の外はすっかり茜色。

だいたいあれから二時間は経っている。

「まだかな」

待っているのはシアンちゃん。

女の子だからとあちらが気を使い、に若い女の人が相手のほうがい  
いだろうということを探し回っていたようだ。

結果時間が遅くなっているという本末転倒具合。僕？僕はばっちり  
怖いオジサンが相手だったけどね！

「何度やっても事情聴取は疲れるな……」

何度も事情聴取受けているというのもアレだけど。

あ、そういえば彼女は帰りどうするんだろう。親の迎えが来るのか  
な。

僕は姉さんが仕事が終わって次第迎えに来るとのこと。

叔母さんでも良かったんだけど、叔母さんは…あの人、いい人なん  
だけれどお節介だから苦手なんだよなあ。

あと、ヤマトはシアンちゃんが署内に入れようとしたけど駄目で、

外に待たせることにした。

ここを出るときにもしまだ彼がいたら僕が引き取るうか。相性最悪でも。

あのアパート、ペット大丈夫だったはずだし。

あいつもなかなか悲惨だよな。飼い主は死ぬし、狙われるしで。

「あ、事情聴取終わったのか」

物思いに耽っている、シアンちゃんが向こうから歩いてきた。

「終わったんだ」

「うん。カツ井は食べられないって言ったら笑われた」

「あはは、そうなんだ」

特に気分を害した様子もない。厳しく詰問されなかったようでホッとすする。

ぽすと彼女は僕の横に座った。

「お母さん来るまでもうちよっとかかるって聞いたから、ヒストリ―話すか」

「ああ…あれか」

闖入者のおかげでシアンちゃんの話がお預けになっていたことを思い出した。

「暗い話になるぞ」

前置きしてから、彼女は後ろの壁に背を預けて天井を見上げた。

「小学生ってさ、残酷なんだ」

「残酷というと」

「常に弱い生き物を探している。なんかきっかけさえあれば、奴らは食いつきにかかるんだ」

「……」

僕が小学生の頃は食いつきすらされなかったな。

子供心に関わったらまずいと思われていたようだ。

「私は目がこんなだから、入学してすぐに標的になった」

彼女は言いながら自分の目の下をなぞる。





「話の続きはまたな。バイバイ、にく」

「うん。バイバイ」

手を振って別れる。

あのお母さんじゃアレルギー持ちじゃなくてもペット許してくれなさそうだ…。

見送ってまた座る。

「……………」 「シアンが自分の話すなんて珍しいな」

「アスマルトさん…どこから聞いてたんですか？」

「ヒストリーから」

ほぼ初めからじゃねーか。

盗み聞きしていたのかよ。

「珍しいって…知っているんですか、彼女の…その、さっきのこと」

「知ってるもなにも。俺の妹を助けたのはあいつだったから」

妹って、マゼンタちゃんのことか。

右目を眼帯で覆ってる子。

「見て分かる通りめったに他人には心開かないあいつが過去話する

とは、信用度アップしたみたいだな」

「…買いかぶりすぎですよ」

僕も過去話したから自分も話さないとフェアじゃないとかそういう理由だろうに。

「…シアンは自分を変えようと必死でな」

「……………」

「小学生はもちろん、中学生高校生のチンピラに構わずケンカを売りにいっていたようだ」

「無謀!?!」

「びつくりしたよ。しかも俺の妹もそれを止めないで逆に参謀してたらしい」

「参謀!?!」

参加じゃなくて参謀かよ!

「今や『破壊神コンビ』とか言われている騒ぎだ」

「あ、それ聞いたことがあります……まさかの彼女たちかよ！」  
オチがとんでもねえ！強いわけだよ！

アスマルトさんは「どこで妹の育て方を間違えちまったんだ」とた  
め息をついた。

「そうだ、カルネ」

「はい」

「お前がなにやったとして、『過去が過去だから』という同情はし  
ない」

「……」

「人を殺すなよ。殺したら全身全霊かけて批難してさげすむ」

「僕が人を殺してしまうようなゲスで最低な人間だと思えますか？」

「うん、思うから言ってる」

乱暴に言い切った！？

「迎えも来たようだし、俺も仕事に戻るよ。じゃーな」

「ほんとだ。えっと、さよなら」

「ん……あと、首輪は預かっといいたから。猫はまだそこにいるんじ  
やないか？」

ひらひらと赤い首輪をポケットからだすアスマルトさん。

すっかり忘れていたけど首輪が狙われていたんだよな。

中身なんなんだろ。

というかよくヤマトが大人しく外させたな。

「気になるか？」

僕の気持ちを讀んだのかアスマルトさんはニヤリと笑った。

「はい、少しは」

「教えなーい」

「ええ！？」

とんでもないフェイントかけられて裏切られた！

「…金だよ金。こんなものの為に犯罪が起きたんだ」

「お金？」

「ま、明日の新聞に載ると思うからそんなときにびっくりしとけよ  
そんなことを言っただけ立ち去る。  
なんだ一体。」

アスマルトさんを見送って、僕は反対方向の出入口に向かう。

「ごめんね、姉さん」

「はあ、全くカルネ君は。入院しなかったただけ良かったわよ」  
デコピンされる。

甘んじて受け入れた。

ニヤアと足元から鳴き声がして姉さんが不思議そうにそちらを見る。

「あれ？猫？」

「今回の中心人物のヤマト」

いたのか。姉さんが抱き上げる。

ヤマトは大人しかった。

大冒険のあとで絆が深まっていると思いついて指を出してみる。

引っ掛かれた。溝が深まる一方だ。

「身寄らないからさ、飼おうかと」

「相性が凄く最悪そうなんだけど？」

「まあ…保健所に連れていくよりかはいいかと」

「私飼うわよ」

高い高いをしながら何でもないように姉さんは言った。

「いいの？」

「武士に伝言はないわ」

「二言だよ」

伝言ゲームでもするのか。

「そうともいうわね。さて、帰りましょうか」

「うん」

今日のお風呂どう入ろう。

「アスマルト？なんで首輪なんか持ってきたんだよ」

「よく見てみる。これ、袋状になってるだろ？」

「そうだな。何かいれるのか？」

「ご名答。俺たちだけじゃどうにもならないから上司のところ行く」  
「う」

「え？何が入ってたんだよ」

「耳貸せ」

「ほい」

「五千万の小切手」

「……………」

「父親に渡されたらしい。たしか被害者の父親は最近亡くなっている」

「じゃ、じゃあ娘にその金をそっくりそのまま渡したってことか？」

「遺産相続で揉めるとでも思ったらしいな。でも兄貴には渡したくない。だから先手を打った」

「でも死んじまったじゃねえかよ……」

「だよなあ。それでも加害者の手には渡らせたくはなかったから、猫の首輪に僥ばせたんだろうな」

「でも猫、逃げたんだろ？やばいじゃん」

「もしだ。もしわざと逃がしたとしたら？」

「は？」

「四階だぜ？それに見たら、玄関に逃げ出し防止の網あったの」

「お、おう」

「だからさ、自分が殺されると分かって逃して  
安全な人間に預けたんじゃないの？」

「あっさり渡される危険もあったのにな」

「それは賭けだったろうな。あいつらは良くやったよ」

「切ないな。自分の死を覚悟してたとか……」

「あくまで予想だがな。ひとつ分かるのは、あの猫はかなり大事に  
されていたことだ」

「なんで？」

「デブでもなくガリでもなく、毛づやが良かった」

「へえ」

「余程大事にされていたんだろっな」

## 黒猫 + 探偵 + 僕 II 事件 後日談

「なんだその包帯」

「いやあははは、階段で転んじやってさ」

数少ない友人が問いかけてきたので全力でとぼけてみせた。

説明とかめんどくさいんだよね。

それに半年前のこともあり、あまり心配はされたくない。

「階段で？バカだな、バーカ」

「大丈夫の一言ぐらい言えないのかお前は」

前言半撤回。ちよつとは心配しろ。

友人はスマートフォンを少し弄ったあとに僕に画面を見せてきた。

「それよりさ、聞いたか？昨日事件があったそうな」

「へー。どうせ幼女が中年の男性に声をかけられたとかそんなやつだろ」

「ちげーよ」

いや、もう分かるんだけどさ。

画面を見ると、昨日の事件がニュースとなっていた。

中心人物であったヤマトのことは一切書いていない。

ついでに僕らのことも。あ、でも暴行罪とは書いてあるな。

余計なことが起きないように、関わったことは伏せておくように頼んだのだ。

「可哀想だね」

それしか言えない。

「しかもこれ、驚くことにだな」

スマホをぺしぺし叩き始める。

時間がかかりそうな気がしたので退屈まぎらわせに辺りを見回す。

めったに起きない殺人事件が身近な所で起きたためか、クラス内は

そんな話で持ちきりだった。

そんなもんだ。



当人達以外にとってはエンターテイメントそのもの。劇の上のお芝居ぐらいに現実感がない。

僕はそれを非難しようと思わないし、道理もない。

「犯人は金を狙っていたんだがな、その額は半端じゃねーんだ！」

「ほう？」

「なんと五千万！」

ガッターン。僕は椅子から落ちた。スイーツ（笑）

「カルネ！？動揺しすぎだろうが！」

「な、なんでもないよ…！」

僕とシアンちゃんはそんなヤバいものと行動していたのかよ！

そりゃ狙うわな！殺す気で来るよな！

よく死ななかつたな僕！そっちにびっくりだわ！

「五千万あつたら何に使えばいいんだろう…！」

「家一軒は買えるだろうな。膨大すぎてイメージ湧かない」

「だよな」

「始めるぞー」

重いドアを開けて担任が入ってきた。

軽く、短い別れを告げて自分の席に座る。

「不審者が多く目撃されている。なにか情報あつたら遠慮なく言っ

てくれ」

変な人、本当に最近増えたよなあ。

シアンちゃん達は大丈夫だろうか。強いとしても心配だ。

逃げない子だから、尚更。

「あと貴重品が最近頻繁に盗まれているから自己管理はキチンとしろよ」

プリントを配って、担任は次の授業の為にさっさと教室を出ていってしまった。

心を盗まれる人いるのかなとかくだらないことを考えた。ルパンかよ。

前の席からプリントが回ってきたので目を通す。

なんてことはない、授業参観のお知らせ。

授業参観か。

小学生の頃はいつ親が来るかずっとそわそわしていたものだ。六年生になると姉さんが来ることもあった。

あれはかなり恥ずかしいものがある。

「カルネ、初っぱなから移動だから行くこつぜ」

「うん」

ええと生物だから、生物室か。

教室から出る前、くしゃりとプリントを丸めてゴミ箱に放り投げた。

## 副会長と僕と窃盗事件 1

その日、僕は図書室で勉強をしていた。

テストはまだ先だけどころそろ準備しておかなければいけない。左腕も順調に治っていき次の受診時には完全にギプスが外される。そんな、大きな事件も起きない平和な日々。

かと思ったのだが。

「誰、ですか」

例えこの一言で厄介事が舞い降りるとしても、聞かざるを得なかった。

さつきから僕の目の前に座りじつと僕を見つめてくる少女。

制服に付けられた校章の色からして同級生なのは確かだ。

眼鏡に、みつあみ。

まさに優等生といった感じ。

「忘れてしまったの？ベッドの上であんな熱い一時を過ごしたのに」「残念ながら僕は布団派でね」くそ真面目な顔でジョークを飛ばしてきたのでこちらもくそ真面目に返答した。

つまらなそうな表情を浮かべ、彼女はやれやれと首を振った。

「もう少し、面白い反応が出来ないわけ？あなた」

「無茶を言わないで下さい。それより、君は誰だい？」

「生徒会副会長、ムトン・ウール。クラスは特AのC組よ」  
記憶を辿ってみてもピンとこない。

そもそも特Aとは交流持っていないんだよな。僕は普通科の理系、生物選択だから。

「うーん…知らないです」

「おかしいわね。あなたには昔、自己紹介したはずだけど」

「ごめん、いつ頃？同じクラスだったっけ」

「あなたとは同じクラスに一度だけなつたけど…まあいいわ」  
彼女は残念そうな顔をした。

同じクラスって、特Aと一緒にになったことはないからな。中学生の時か？

ムトンさんは腕組みをして、じと目で僕を観察する。

これでシニカルな笑みを浮かべて机に肘をつけ、組んだ両手の上に顎を乗せていたらぶん殴っていたところだ。

アイツのことが大嫌いなくせにしっかり癖を覚えている僕って…。転校したけどアイツ生きてるのかな。

「ま、これから覚えて貰えばいいわ。あなたに頼みがあるの」

「頼み？」

「校内で頻繁に今、貴重品が盗まれているでしょう？」

嫌な予感がした。

「犯人探し、手伝ってくれない？」

嫌な予感的中だ。

「どうしてそれを僕に……」

身を乗り出してムトンさんは小さな声で言った。

「あなたバイトしているんでしょ？」

頭の中が真っ白になった。

どうして彼女がそれを知っているんだ。

友人ぐらいしか言っただことないのに。

「この学校、基本的にバイト禁止なんだけど知ってた？」

もちろんだ。

生徒手帳に一度二度目を通していているから、バイトが禁止なことは知っている。

もしバレたら生活指導の先生と密室で一時間みっちり叱られ、それから原稿用紙五枚の反省文。

「……」

もしかしたら前回の猫探し騒動よりもはるかにヤバいかもしれない。

冷や汗が止まらない。

「……ギロチン台にあがる人みたいな、絶望に染まった顔してるけど」なんだその例え。

「きよ、脅迫？やらなきゃバラすとかそついう？」

「ええ」

ガッターン。僕は死んだ。スイーツ（笑）

椅子から転がり落ちた。最近よく落ちるな。

「金を出せとかじゃないわ。あなたの推理力を買って頼みごとしたいわけ」

「そんな、探偵じゃあるまいし。ていうか、探偵でも推理しないよ」

「話を反らさない。別に探偵であろうがなかるうが推理力には関係ないでしょ」

「僕、推理力まるでないんだけど」

「……あなた、ほんつつつとうに忘れてしまったわけ？」

呆れたような寂しいような、そんな声色だった。

むむ、これは早急に思い出す必要があるみたいだな。

中二から前ぐらいのことだろう。その後の時期は人付き合い遮断していたし。

お陰様で今は友達少ないわけだ。

まさに自業自得。僕を怖がって離れた人もいたりするんだよな。

話を元に戻そう。

「でも今、防犯対策とかちゃんとやってるし」

「それでもダメ。見回っても簡易な鍵をかけても盗まれてしまっている」

「それは不思議だね……」

ミスターマリツクやら鍵っ子キャサリンやらいるなら話は別だが、非常に悩ましいため息をついて生徒会副会長は俯いた。

「生徒会としても、なんとかしたいんだけどなかなか……」

そして掴んだ藁が僕だったと。

確かにここんところクラスメイトも頻繁にも盗まれてるからな。

早めに対処しないとこちらにも被害がくる。

「…ま、頼まれたからにはやるよ」

「本当に？」

「ただし、結果は期待しないでね」

所詮能力なんかない普通の男子生徒なんだから。

「ありがとう」

そう言った彼女の顔を、僕は昔見たことがあったように錯覚した。

本当にそれを前見たことがあったのか、脳が勝手に先ほどの話を合成して「あつたこと」<sup>はかど</sup>にしてるのは分からない。

というか勉強<sup>はかど</sup>抄らねえ。

## 副会長と僕と窃盗事件 2

「熱心なのね」

五時になり、図書室が閉館となったので追い出された後ムトンさんがそんなことを言った。

「何が？」

「勉強。まだテストまで二週間以上もあるけど？」

「奨学金暮らしのカルネットイだからね。それなりに成績は取らないといけないんだ」

「カルネットイで」

呆れたようにツッコまれた。事実なんだからしょうがない。

「評定平均3.0越えているなら、大丈夫なんじゃない？」

さすが特A。

奨学金とかの知識もちゃんと兼ね揃えているんだな。

それか特Aじゃなくても常識的に知っているものなのかな。

「まあそうなんだけどさ。それなりに優秀なら就職有利だろうし」  
部活といい生徒会活動といい一切やっていないためにそういうところでカバーしなくてはいけないのだ。これで成績もアレだとすごい無気力な奴だと思われてしまう。半年前に入院もしちゃったからその分の埋め合わせもしなくてはいけない。

「奨学金なら大学進学できるんじゃない？」

「進学は狙ってないや。あと後から返すの大変になっちゃうし」

「…そう。あなた変わったわね」

「いやだからさ、僕たちどこかで会ったっけ？」

外見が大きく変わっているから分からないのかな。

なにかヒントくれればいいのに。

「宿題。思い出すまで思い出しなさい」

んな無茶な。しかしながら抗議は一切受け付けないようだ。

流れで駐輪場までいっしょに歩いていく。

「じゃ、これからよろしくね」ムトンさんは軽やかにジョセフィーヌ（自転車、名前は今僕が決めた）に跨がる。

「まあ……よろしく」

これからも彼女とかかわり合いになることがあるのだろうか。

いやかかわり合いはあつたみたいなんだけどな、僕。

とにかくも、そこでムトンさんと別れた。

学校帰りにスーパーへ寄る。

夕方この時間だ、そこそこに混んでいた。

タイムセールが始まったらしく、おばさん方が肉売り場で押し合いへし合いしている。

「押しくらまんじゅう大会でもしてるのかな、あれ」

はた目から見ればそんな感じ。

今日は魚の気分だったので戦場に特攻するようなことはしなかった。爆砕確定だよ、あんなのに突っ込んだら。

「野菜買って…パンも買おうかな」

「あとデザートにはシュークリームかエクレアがいい」

「エクレアおいしいけど口の回りとか手がチヨコだらけになるから嫌だ」

「幸福の裏には必ず犠牲が付き物だってやつだ、我慢しろ」

「……………」

今更だ。

今更、気付いた。

自然に会話していたけど、本来なら僕は一人で来ているから終始無言のはずだ。



「でもさつき盛大に独り言呟いてただろ」

「うるせーよ、人の心理描写にちゃちゃいれんな」  
斜め後ろを振り向く。

予想通り、そこにはシュヴァインが立っていた。

相変わらずのだるそうな雰囲気醸し出している。

「…なんでお前が、こんなところに？」

「いちや悪いか」「別にそんなことは言っていないけどさ」

なんで奥さまたちに混じってこいつがいるのか。

時刻は五時半ちょい過ぎ。

サラリーマンならまだ上司の圧力にストレスを抱えていたり同僚の仕事のサボりっぷりにイラついたりしている頃だろう。

…サラリーマンへの偏見が半端ないな。

とにかく、探偵といえど確か事務所は六時まで勤務のはずだ。

今日は休みだったのだろうか。

僕が考えごとをしていることに気づいたのか、シュヴァインがぶっきらぼうに答えた。

「これから徹夜で浮気調査なんだよ」

少しばかりイライラしたように続ける。

「ラブホの出入り写真及び、浮気相手と行った場所、買ったものをすべて記録しろと」

「うわあ」

ご愁傷様としかいえない。

注文多すぎだろうが。どこまで決定的証拠を押さえないんだ。

「だから簡単に食べられる夜食を買いに来たわけだ」

「そうなんだ…」

いやはや、社会人って大変だな。

そう考えると学生時代はかなり貴重だよな。机に座って授業受ければいいんだし、居眠りだってできる。

本当はダメだけどね、居眠り。

スーパ―内で話し込むのもなんなので会計を済ませて外に出る。

「肌寒いな。五月も近いというのに」

「梅雨が終われば暑い暑いということになるよ」

「また事務所のクーラー壊れたら俺はもうダメかもしれん」

普段弱音なんか吐かないシユヴァインがそんな弱音を吐くとは。

確かに去年のクーラー壊れた事務所は地獄だった。死ぬかと思った。

「扇風機も役立たずだったよね」

「だな。結局ライス先輩の財力で直して一件落着になったが」

そうだったのか。

ライスさん一体何者なんだろうな。

着ているスーツもなかなか上等なものだし。たたくまいも上品だし。

でも口はたまに悪いような。

「じゃあ、僕は帰るよ。頑張つてね」

「ああ」

ムトンさんの時よりもあっさりとは別れる。

これが長年（二年弱だが）の付き合いの差というものなのかな。ど

うでもいいか。

さ、アパートに帰ろう。

### 副会長と僕と窃盗事件 3

アパートの外階段を昇り、209号室の前に立ち鍵を取り出す。錠が外されたノブは抵抗なく回り、ドアを開いて中へと入る。真つ暗な部屋。

「ただいま」

呼び掛けても誰もいない。

当たり前だ。僕以外誰も住んでいないんだから。

二年前からずっと。

二年前はここには住んでいなくて、ただいまと言えばおかえりと言ってくれる人がいた。

「……はあ」

小さくため息をついて、堂々巡りをする思考に休止符を打つ。

考えたところで。

悩んだところで。

苦しんだところで。

時は元に戻らない。

もし戻るなら僕は考えよう。悩もう。苦しもう。

傷つこうが、動けなくなろうが、そんなことは些細なことだ。

あの時が戻ってくれるなら、どんな大きい代償でも受け入れよう。

「でも、まあ」

現実、絶対にそんなことは起きないんだけど。

……お腹すいた。

思考でお腹は膨れない。

翌日。

クラスにはちらほらとしか生徒がない。まだ時間早いからな。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

まだ4月下旬だというのに暑苦しく汗をかいている友人。

パタパタと教科書で顔を扇いでいた。

部活の朝練か。確か柔道部だったっけな。

「よく頑張るね…。嫌にならないの？」

「朝から男と取っ組み合えるんだぜ？こんな好機逃すわけには」

「はいはいはい」

そうだった、こいつ男が恋愛対象だったんだ。

不純な動機すぎるだろ。

「あ、そういえばさ、カルネ」

「ん？」「昨日女の子と帰ってたんだって？」

ニヤニヤとする友人。

「……………あー」

ムトンさんのことか。

友人は僕と違って付き合いが広い。

だからこういう情報もすぐに入るのだろう。特に色恋沙汰は。

つまり僕は付き合いが狭いという悲しい事実に行き当たるのだが。

まあ、高校入学早々寄りにくいムード作っちゃっていたから仕方ないともいえる。

言い訳させてもらうと、あの時はいっぱいいっぱいだったし。

「とうとうお前も彼女持ちかあ、良かったな」

「あ、いやその事なんだけどね」

要約して説明する。

すべて聞き終えて友人が首を傾げた。

「過去に関わった人間なことは確かみたいだな」

「うん」

「だけども思い出せない」と

「うん」

「…すぐ教えないそいつもそいつだが、覚えてないお前もお前だぞ

……」

「うっ」

だって人の顔とかすごいインパクトあるひとじゃないとすぐ忘れちゃうじゃん…。

高飛車な性格の人で脳内検索してみたけど引つ掛からないし。

「性格はちよつとずつでも変わるしな。今の性格が昔の性格とは限らないだろ」

「そうかな？」

「カルネが一番良い例だろ」

「うーん………そうみたいけどさ」

それはよく聞く。

前より印象が良くなったとか悪くなったとかの意見はまた別にして。

「ま、協力できることならしてやるよ」

「ありがと、かなり助かる」

「お嬢さまの面倒は大変だな」

「あははは」

「楽しそうね。わたしも混ぜてくれない？」

突然。

僕たちの後ろから声が聞こえた。

「………」

「………」

摂氏零度のその声色に凍りつく。

ゆっくりと振り向くと生徒会副会長が立っていた。

さながら、鬼のようだ。

「鬼副会長じゃありませんか…」

友人が固まった表情で言葉を絞り出した。  
鬼なのかよ。

というかそれ言っちゃっていいのかよ。

「失礼ね。会長が仏すぎるだけよ」

「…いや、まあそうだろうが…なんで特Aの副会長サマがここに」

「ペンサーレ君に話があるの」

「え、僕に？」

朝からご指名ありがとうございまーすってか。

目を丸くして事を見守るクラスメイトに助けを求めてみるも、効果はないようだ。

…そこまで深い関係じゃないしなあ。

「ホームルームまでには帰ってこいよ、カルネ」

「まず助けてほしい」

かくして、朝から僕は拉致られたのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0822z/>

---

僕のバイトは探偵です。

2012年1月6日14時46分発行